

受付番号

留学・研究計画書

氏名 石橋 弘之	留学機関名 王立プノンペン大学
留学先国名 カンボジア王国	留学期間 西暦 2010 年 4 月 ~ 2012 年 3 月
研究テーマ カンボジアの森林地域における社会復興 —カルダモン山脈における在来資源利用と環境保全活動の関りに着目して	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>【研究目的】本研究の目的は、カンボジア南西部カルダモン山脈の地域社会における社会復興の動態について、(1)地域在来の自然資源の利用や自然環境に関する慣習について住民の世代間での知識継承に着目し、(2) NGO や森林行政による環境保全活動と地域在来の資源利用との相互関係を考察し、(3) 地域社会の復興を視野に入れた際に求められる環境保全活動のあり方を検討することである。</p> <p>【研究の背景】研究対象のカルダモン山脈は、カンボジア国内の森林地域の中でも比較的、森林が豊富に残る地域の一つであり、その地域社会の生業や慣習は森林に生息する動植物に深い関わりをもつ。その一方で近年は、カルダモン山脈における生物多様性保全を目的とする環境保全活動がカンボジア農林水産省森林局、環境省、国際環境 NGO である Conservation International(CI)や Fauna and Flora International(FFI)により推進されている。</p> <p>しかし、カルダモン山脈はカンボジア内戦が事実上の終結を迎えた 1990 年代末まで反政府勢力の拠点となり紛争下にあった地域が含まれていた歴史をもつ。そのため、カルダモン山脈では、カンボジア国内の他地域に比べて、地域社会の復興が着手され始めた時期に大きく開きがある。</p> <p>実際に、カルダモン山脈では地域社会の祭礼や自然資源の利用に関連する慣習が長期にわたり中断されていた例があり、地域の慣習に対する理解や実践の状況には地域差や世代間の差があることが、これまでに申請者が行った現地調査の中で見られた。</p> <p>カルダモン山脈では 2002 年に山脈の中央部に中央カルダモン保護林が設立されて以降、NGO による支援のもとで環境保全活動が積極的に推進されてきた。しかし、地域の歴史的背景を踏まえると、社会復興を視野に入れた環境保全活動を検討することが望まれる。NGO による活動の中には住民の生業や慣習に対する支援も含まれるが、社会復興の実態を捉えるには、外部からの支援内容だけでなく、住民間で在来の知識を伝承する世代と受け継ぐ世代の関係を捉えるとともに、NGO などの外部の主体が地域在来の資源利用をどのように捉え、住民は NGO による保全活動をどのように捉えているのか、すなわち、地域内外の主体の相互関係にも注目する必要がある。</p> <p>【研究の意義】紛争後の社会復興に関する研究では、カンボジアの事例を含めて森林地域や環境保全との関係から考察した研究事例は少ない。本研究では地域社会の具体的な動向から森林地域の社会復興の実態とともに、環境保全の分野における社会復興を実証的に解明する学術的意義をもつ。また、地域社会の動向だけでなく地域に対して外部から関わる NGO や森林行政との関係性の考察範囲に含めることは、地域社会と行政や NGO の協働による森林・環境分野の復興のあり方を考察する上で重要な社会的意義をもつ。</p>	

成果報告書

記入日 2012年 4月 13日

氏名 石橋弘之	留学先国名 カンボジア王国	所属機関 王立プノンペン大学
研究テーマ:カンボジアの森林地域における社会復興 —カルダモン山脈における在来資源利用と環境保全活動の関わりに着目して		
留学期間 : 2010 年 6 月 ~ 2012 年 3 月		
<p>はじめに</p> <p>留学中は王立プノンペン大学の生物多様性保全プログラムのリサーチ・アソシエートとして在籍しつつ、調査地のカルダモン山脈各地は保護地域になっている点を考慮して、保護地域の運営を支援する NGO をカウンターパートとした。その際に、環境省管轄下のプノム・サモコス野生動物保護区(以下保護区)での調査は Fauna & Flora International (FFI)、農林水産省森林局管轄下の中央カルダモン保護林(以下保護林)での調査は Conservation International (CI)の協力を得て許可証を取得後に調査を始めた。また、留学中に新しく訪れた村では全国的な先住民運動に関わる住民に出会う機会があった。こうした様々な立場の人々との交流過程で研究内容は、学術と実践の両面を含むものとなったが、その経緯も含めて留学成果を報告したい。</p> <p>留学計画を立てた当初はカンボジア西部森林地域のカルダモン山脈の地域在来の資源利用を理解した上で、社会復興を視野に入れた環境保全のあり方を考えることを目標としていた。これは対象地では 90 年代末の内戦終結時まで戦時下にあった地域を含み、その影響で資源利用に関する知識継承が世代間で課題になっている点、そして、現在は山脈各地で保護地域が設立され環境保全活動が進められているが、地域の歴史を踏まえると、保全活動においても内戦からの社会復興を視野に入れることが重要ではないかと留学前の修士課程の研究を通じて考えたからであった。</p> <p>ところが、留学中の現地滞在を通じて、近年カンボジア全国に拡大している大規模な開発事業がカルダモン山脈各地でも進められ、それとともに地域の社会と環境が急変する様子を目の当りにした。村への訪問を繰り返すごとに森がなくなっており、あまりの変化のスピードの速さに驚きと戸惑いも覚えた。しかし、その一方で、地域によっては住民が全国的な先住民運動に参加して、その経験を現場問題の対応に活かそうとする動きがあることも知った。こうした経緯を経て、地域のこれまでの歴史を理解する点では、従来の計画どおり研究を進め、同時に住民が現在の社会の変化にどのように対応しているのかを理解することにも務めた。</p> <p>調査地と調査方法は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・村落調査:カルダモン山脈各地の村落での住民への聞き取り、地元行事や生業の参与観察。訪れた場所は、ポーサット州ヴィアル・ヴェーン郡(OS 区、P 区、AR 区)、ポーサット州プノム・クロヴァーニュー郡 R 区 K 集落、バツタンバン州サムロート郡 TT 区 PR 村、コッコン州トゥモー・バーン郡 RC 区、TTL 区、TDP 区である。 ・ワークショップへの参加:首都プノンペン、地方州都、NGO 事務所で開催された会議、ワークショップやイベントにて住民、NGO、環境省、森林局の関係者と議論・聞き取り、活動計画の打ち合わせ、一部の調査は合同で実施した。 ・文献調査:国立公文書館、フランス極東学院、現地書店、NGO 事務所での文献収集、現地新聞の購読。 		

以下では、対象地を代表する資源の一つであるカルダモンの利用に関する動きを中心に、I) 地域社会における生業と慣習の歴史、II) 山脈の人々が現代カンボジアの変化の中で直面している現状と課題、III) 社会や環境の変化のなかで住民が生業や慣習をどのように維持・適応・再興しようとしているのかを報告する。

I. カルダモン山脈の地域社会における生業と慣習の歴史

地名の由来 カルダモン山脈はその名が示すようにショウガ科植物のカルダモンの名産地として歴史的に知られる。カルダモンは木陰に育ち、その実が採取され解熱剤、風邪薬、消火剤などの機能をもつ伝統薬に使われる。その薬用機能は地域外からの需要を呼び、地元では住民の現金収入源としてカルダモンが売られると同時に、19世紀末の仏植民地期から1960年代にかけては国家が整備した販売制度を経て主に中国に向けて輸出されてきた。

民族 調査地ではモン＝クメール系ペアル語派の民族であるチョーンやソムライの人々が暮らし、1960年代までは、農業(畑と水田)、カルダモン(*Amomum kravanh*)、クラコー(*Amomum ovodieuum*)、樹脂、沈香、ラタン(藤)の採取と販売、狩猟や漁労を主な生業としてきた。

慣習的指導者 山脈の各地では地域を慣習的に治めてきた指導者がいた。その役割は大きく3つに分けられる。

1)「里の主(現地語 *Mcha Srok, TaKhvay, Komnan, MeSmung*)」は年中行事、守護霊、祖霊に関わる儀礼の祭司、
2)「山林の責任者、森の主(現地語 *Dongkhaw, Smoon, MeSmoon, MeKoi*)」は、カルダモン、沈香、樹脂の採取に行く集団を動物の襲撃から守るための儀礼の祭司、3)「長老(現地語 *Chas Tom, Chas Srok, Chuh Naang*)」は歴史、伝統、生活の知識をもち、次世代への教育指導や村内の問題の仲裁役である。これらの点は各地に概ね共通しているが、役割のあり方は地域や時代により異なる場合、複数の役割を同一人物が兼ねる場合もあった。

カルダモンの森の主 カルダモンに関しては山脈各地に分布するそれぞれのカルダモンの森に対して、森の名、森の主、採取村が定められていた。森の主はカルダモンの実が熟する7月頃に解禁儀礼を行い、儀礼を経て採取が行われたが、これに先立ち採取時期が近づくと実の成熟度合いの確認も行われた。森の主の役割は世襲を通じて次世代へと後継されたが、その多くはバタンバン州とポーサット州に住むソムライの人々が担った。一例を挙げるとバタンバン州PR村のソムライの人々の伝承ではアンコール期(9~15世紀)の王がカルダモンの森を守るために派遣した獵師を始祖としており、その始祖たちの名は現在もその他の年中行事の際に唱えられている。

カルダモンを介した地域間の交流 興味深い例として、1930年代には、バタンバン州の里の主であり森の主であったTaSa氏と、ポーサット州の森の主TaPrak氏の間に交流があった。さらに、この2人の森の主の曾孫同士も先住民運動を通じて現在も交流があり、後述するカルダモン森の地図作成の活動にも関わっている。植民地期における交流の背景には、バタンバン州の森の主の村はかつてタイ領下にあった時期もあり、仏領政府との国境紛争や税の取り立てから逃れるために頻繁に村の場所を移動した経緯があり、慣習を把握する人が限られていたため、ポーサット州から慣習に詳しい森の主を招待した経緯があったようである。ポーサット州から来たTaPrak氏は長老役として里の主が過ちを起こした場合、別の人に交換させる権利もあったとされる。

植栽 過去にはカルダモンの植栽を通じた地域間の交流もあった。植栽は同じ森の中でカルダモンの自生する場所から、そうでない場所に植える場合もあったが、ある地域から別の地域にゾウに乗せて植栽する例もあった。特にカルダモンが豊富にあったポーサット州からコッコン州、バタンバン州に植えたという例が聞き取りで確認された。

また、現在のポーサット州R区K集落では同一地域内のもともと昔からあった森に自生していたカルダモンを別の山や森に植えて新しくカルダモンの森をつくる試みもあった。この際に、新しく作られた森の主の役割はすでに里の主の地位のあった人物が選ばれた。

このように、植栽活動が活発になされた理由として、カルダモンは日陰となる木があれば、植えて3年後には発芽～実が熟するという繁殖しやすい資源の特性も関連していたと考えられる。

II カルダモンの慣習の現状

慣習的指導者の現状 山脈の各地で訪れた村では里の主、長老の役割は現在も実践されているが、カルダモン、沈香、樹脂の責任者の役割はほぼ実施されてなかった。この背景には、昔とは異なる持続的でない方法での採取による資源の減少、終戦後の居住地開拓や商品作物の流行にともなう農地の拡大、水力発電ダムや経済コンセッション等の大規模開発事業の実施、高級木材の伐採の流行、森を伐採しての土地売買等が挙げられる。

森の主の役割の現状 前述したポーサット州とバットンバン州の森の主の子孫も現在はカルダモンの儀礼や慣習を実施してない。1970年代以降の内戦の過程で、村を森から遠い位置に変更せざるを得なかったこと、一部の森には現在も地雷が残っていること、また、政治体制が変化し、過去に利用されていた森の範囲が保護区に重複し、特に保護区運営の法制度上、利用規制の最も厳しい区域に森が重複している問題が背景にある。

一方、ポーサット州 OS 区に限り、現在もカルダモンの解禁儀礼が行われているが、儀礼の祭司(90才)は自身の民族はチョーンであり「自分は森の主ではなく、里の主(*komnan*)」という。この背景には TaSom という人物の存在が関係している。TaSom は森の主の直接の家系にはないが、過去に森の主と交流がありカルダモンの慣習の実践経験をもち、1970年代以降中断されていた儀礼を1990年代初めに再開させた長老かつ里の主であり、戦時中に森への避難と社会復興を主導した功績が住民から認められ、死後に守護霊として祀られた。その後継として親族関係にある現在の祭司が現在も解禁儀礼を行っているのである。また、TaSom の義理の息子は NGO の支援する保護林のパトロール活動の住民担当でもあり、儀礼の前には森に入り実の成熟度を確認する慣習を現在も続けている。現在の OS 区では主食のコメが不足する時期の食糧購入用の現金収入源としてもカルダモンが採取されている。

解禁儀礼の現状 しかし、OS 区でもカルダモンの儀礼を従来のように続けるのは困難になっている。たとえば、2010年には、解禁儀礼の時期をめぐり祭司の親族と採取者の間で見解の不一致があった。祭司の親族は慣習に従い7月に儀礼の日程を設定したのだが、採取者は従来よりも早くカルダモンの実が熟していたと主張し、儀礼に先駆けて採取を始める人もいた。もともと OS 区は雨量の多い地域だったが、この年は旱魃と不規則な雨が続き、こうした、天候不順もカルダモンの熟する時期に影響を与えたと推測される。また、2011年は儀礼の参加者も前年の20人前後から10人前後に減少、時間も前年の午前中一杯から1時間未満に縮小、霊媒に霊を降ろし相談する過程も省略された。わずか1年の間に慣習の実践も急激に変化しているが、カルダモンの森も並行して大きく変化している。

カルダモンの森の減少と背景 この背景にダム開発の影響が挙げられる。OS 区に初めて訪問した2008年は村へのアクセスは困難であったが、この数年で道路も整備され、2009年はダム貯水池の整備を名目に高級木材の紫檀伐採が流行した。さらに2011~2012年頃に木材が底をつき始めると、貯水池用に整備した土地や、森を伐採した土地を企業や外来の商人が購入してトウモロコシ、キャッサバといった商品作物のプランテーションに転化し始めた。こうした外部要因による森林減少は目に見えて明らかだが、その一方で住民の農地のなかにも過去はカルダモンの森だった場所が含まれる。かつて住民はカルダモンの森を「禁忌の森」とも呼び、伐採するとトラに襲われるとされていた。そのような場所をなぜ住民は伐採したのだろうか。

住民によると、「外から来た人が伐採しても何も起きないのを見て後に続いた」「稲を植えるために開墾した。土地が良いから」「今は森を伐採して土地を売る人がいる」という意見がある一方、もとはカルダモンの森を避けた場所を農地に選んでいたがダム開発で土地を全て失い仕方なく森の近くに場所を変えた人もいた。このほかに、90年代後半以降の密猟によるトラの減少、カルダモンの森内にあるハマビシ(蔓性植物)、テーブルーの木(麻薬用油の採取できる木)などの資源採取の流行、そして、90年代後半の森林コンセッション企業による林道建設も森林減少の遠因になっていた。

Ⅲ. カルダモンの慣習の維持・適応・再興に向けた試み

先住民運動への参加 上記のような問題は全国各地でも広がりつつあるが、最近では先住民運動に参加して現場の問題への対応に活かそうとする住民の動きもある。Indigenous Rights Activist Members (IRAM) は2004年のカンボジア初の先住少数民族全国フォーラムの開催を発端とする、15州11民族が参加する先住民運動の全国ネットワークであり、複数のNGOが支援する全国レベルの会議や研修を通じて、先住民族の権利に関する法制度の学習、地元問題の原因・影響・対策の議論、他地域住民との問題共有・相互交流を活発に行っている。

カルダモン山脈の住民のなかにも IRAM に参加する人々がおり、この中には先述した植民地時代に交流のあったポーサット州とバタンバン州の森の主の子孫もいて、現在はカルダモンの慣習を実施してはいないものの、慣習の再興への関心をもっていた。これらの人々と交流を通じてカルダモンの歴史や慣習の聞き取りを進める過程でカルダモンの森の地図を作る活動が次第に形になっていった。

カルダモンの森の地図作成活動 具体的には IRAM に参加するポーサット州の森の主の子孫に会い過去のカルダモンの森の大まかな位置を調べるために国立公文書館で入手した植民地期の地図資料を用いて聞き取りをしていた際に、森の主の子孫みずからがペンを取り集落や山、カルダモンの森の位置を示す地図を描いてくれたことがきっかけになった。この地図について保護区の運営に関わるNGOも関心を持ち、その他の地域の森の主の子孫や住民、IRAMメンバーとも協力して山脈各地にあった森の位置を地図にする試みを始めることになった。

そもそも、カルダモン山脈という地名があるものの、実際のカルダモンの森の正確な分布は先行研究でもほとんどわかってない。2002年に設立された保護林では土地利用計画策定を通じてポーサット州OS区とココン州RC区の2か所の森の位置が特定されたが、これ以外では植民地期史料にわずかに地名が記されているのみである。よって、地図作成の主な目的はカルダモンの森の歴史上の分布を理解する点にあった。ただし、地図というものがもつ政治性や社会的影響も考慮する必要があると考え、この旨を説明して各立場に意見、目的、利点・欠点を聞き取り整理した：その例を挙げると、(1)研究者(筆者)は住民の森林の慣習的利用権向上への側面支援を期待、(2)森の主の子孫はカルダモンの慣習の再興、土地利用権の確保、カルダモンの植栽による再生、(3)保護区運営に関するNGOや環境省関係者は将来の資源管理計画、非木材林産物の販売活動、土地利用の計画策定に活かしたい意見をもった。ただし、なかには慣習が守られないことを懸念して儀礼の再開に気が進まないという年配者や、森の土地が企業の開発計画と重複することが明るみになり問題にならないかと懸念する住民もいた。その一方で、アウラル地域ネットワークというカンボジア西部地域の市民運動のとりくみとして地図を使って地域資源を守る活動に反映させたいという意見もあった。

実際の作業では、ポーサット州P区およびR区K集落、バタンバン州PR村にて、手描きの地図作成、その後NGO職員が地理情報技術を用いた地図作成を担当した。その結果、ポーサット州、バタンバン州、ココン州と合わせて30のカルダモンの森があり、うち28には1960年代までは森の主がいたことがわかった。

カルダモンの再生の可能性の調査 また、森の過去の位置を把握した一方で、森の将来についても住民の意見を把握したいと考え、特に森林減少が進むOS区にてカルダモンを植えて再生できるかどうかの可能性の聞き取りを行った。否定的な意見には「住民はトウモロコシを植えるので忙しい」「正直いうと家族を養うので精一杯で時間の余裕が難しい」というものがあった。その一方で肯定的な意見には「カルダモンを失うのは民族と文化を失うのと同じ」「カルダモンは『古植物資源』として、ジャックフルーツなど日陰になりかつ収入源になるような果樹とカルダモンの混作に関心を示す意見や、森林減少の現状を危惧して「カルダモンの種は絶やしてはいけない」としてすでに自主的に家の庭にカルダモンを植えている住民もいた。

IV. まとめ、および、留学全般の感想

留学を通じてカンボジアの急激な変化の中で地域社会が様々な困難に直面している実状をはっきりと認識した。それと同時に現状にいかに対応できるかを模索する取り組みもあることも理解できた。その過程に私自身の研究が直接関与するとは想像していなかったのが、そうなった当初は混乱するばかりであったが、次第に村の現場や NGO の間を自由に行き来して様々な主体を仲介できる立場に自分がいること、これを活かして研究と実践の過程を共有できる点に大きな意味があると自覚するようになった。

なかでも特に森の地図を作る活動は歴史を理解したいという私の個人的な目的から始まったものであるが、結果として様々な立場の人と関わる動きになっていった。地図作成の結果の重要な点は過去にカルダモンの森があった時期には、そのほとんどが現場レベルにおいて森の主の存在を中心に森の維持管理がされていたと推測される点である。これは、将来の資源管理計画の策定において、現代における慣習的指導者の役割を再考するとともに、公的制度と慣習制度の連携のあり方を検討する必要性を示唆する。地図作成の取り組みは、さらに調査の必要な場所もあるため、現在も進行中であるが、実際に地図がどのように使われ、どのような影響をもたらすのかという点は今後も注視する必要がある。資源管理やカルダモンの市場策定に関しても、一部の森には地雷原も含まれることを考慮して人々が確実に安全に利用できるようにするための森の状態の調査や考える代替案の策定も重要課題である。カルダモンが歴史的に人々の植栽活動と智雄に利用されて来た点は、安全な場所にカルダモンの森を新たにつくり、すでに失われた森を再生する可能性の一案となると思われる。

こうした活動においては利害関係者との調整も大事になるが、そのなかでも、開発計画の実施過程でこれまで、十分に協議への参加が認められてこなかった住民の立場への配慮が重要となる。バタンバン州 PR 村の森の主の子孫の方から、よく「住民は博士」と言われることがあったが、これは外から来た私のような学生も住民に教えてもらわなければ現場では何も学べないということを意味するものだが、これは外部から現場の人々に関わる者として常に忘れてはならない点である。

もう一つ留学を通じて印象に残っているのが、人々の地域と時間をこえたつながりである。留学中には山脈の複数の村を訪れ、それ以外でも首都や地方都市のワークショップのイベントに参加するために様々なところに訪れたが、別の場所で会ったことのある人と偶然出会うことや、あるところで会ったことのある人の共通の知人に会うことが何度もあった。当初は新しい村を訪れる楽しみはあったが、同時に複数の村をまわっていてバランスをとれるだろうかとの心配もあった。しかし、先行研究の写真資料を見せるとその子供・孫・曾孫に会い、私自身が撮影した写真を複数の地域の村人に見せると知人や親戚同士ということが少なからずあった。こうした経験の積み重ねが複数の地域間の人々の歴史的な関係が現在も維持されていることを自覚することにもなり、現地の滞在をより意味深いものにした。

複数の地域に共通の知人・親戚の人がいる背景には戦争中の人々の移動も関係しているのだが、地域の慣習は人々の交流を通じて維持されてきた側面もあること、現在は先住民運動がその場と機会の一つとなっているが、カルダモンという植物が過去から現在を通して山脈各地の人が共通に利用してきた資源という点も人々をつなぐ重要な要素の一つではないかと考えるきっかけにもなった。こうした地域の間にも歴史的に存在した人のつながりの過去と現在その再編の動きにも注目して今後の研究にも反映できればと思うが、研究という枠をこえた、人間どうしの貴重な出会いというところで、日本人の自分自身も関わっていることも自覚して、これがカンボジアと日本との関係を深めるきっかけにしていければと思う。今後は博士論文の執筆に向けて研究を続けていくことになるが、この留学は博士論文を完成させていく上でも重要な経験であった。この大変貴重な機会を頂き現地滞在を支えて頂いた全ての方に感謝を申し上げたい。

V. 留学中の研究発表

【口頭発表】

石橋弘之(2012)「カンボジア西部森林地域における慣習的指導者の役割の検討」日本カンボジア研究会プノンペン部会 2012年2月25日

石橋弘之(2010)「なぜ、住民はカルダモンを組合ではなく商人に売するのか? : 販売組合の運営と収穫解禁の慣習実践をめぐる社会関係からの検討」日本カンボジア研究会プノンペン部会 2010年9月11日

Hiroyuki, Ishibashi(2010) “How do Local People Adapt Use of Natural Resources to Changes?: Case Study from the Use of Cardamom in the Cardamom Mountains, Cambodia”(プノンペン大学ゲストレクチャー2010年9月23日)

【論文・記事】

石橋 弘之(2010)「近現代カンボジアの社会変動下におけるカルダモン利用の動態 —収穫現場の統率者, 販売制度, 保全活動をめぐる地域環境史」、『東南アジア研究』48巻2号、pp. 155-204.

Hiroyuki, Ishibashi, Ma Sophal, Choun Phiom, Oum Sony, Eng Polo, Hor Leng, Chhut Chhoun, , Yien Duun (2012) Mapping Historical Change of Cardamom Forest Distribution in Cambodia, *Cambodia NTFP Working Group News Letter*. (現地ニュースレターに掲載予定)

VI. 留学中の写真



採取されたカルダモンの実。
2011年6月30日ポーサット州OS区



村人の庭に植えられたカルダモンと
森の主の子孫チュート・チョーン氏(右)
2010年10月バットンバン州PR村



世界の先住民族の日のイベントでカルダモンの説明をする
ポーサット州P区の森の主の子孫イエン・ドゥーン氏(中央)。
2011年8月9日シハヌークヴィル州コンボンサオム市



カルダモンの森の手描き地図を作成する村人と
長老・森の主の子孫クヴァエク・ドゥム氏(左)。
2012年月3月日ポーサット州R区K集落